

[第32回学術集会 シンポジウム2]

「きょうだい」として過ごすこと

株式会社LITALICO

野田 遥

私には自閉症と知的障害の当事者である弟がいる。一般的に「きょうだい児」と呼ばれる立場である。

家族の一員として過ごす中で、きょうだい児として良き兄であることと、自分らしく振る舞うことは時に矛盾する。この経験は私だけではなく、多くのきょうだい児と共有できるものだろう。恐らく両親にとっても同様で、私にとっての良き親であることと、弟にとってそうあることの両立に困難を覚えた瞬間が数多くあったのではないかと推察する。

同時に、当事者であることを理由として家族の中心に置かれざるを得ない弟に対して、家族として寄り添いたい気持ちも当然存在していたし、一番の理解者でありたいと願う気持ちは今も変わらない。私たちは、そうした複雑な感情の中で家族として共に暮らしてきたように思う。

私はきょうだい児であると同時に、作業療法士・研

究者として専門家でもある。その上で本シンポジウムでは「きょうだい」として過ごす中で感じた葛藤や喜び、私の目線から見た弟や両親について語ることによって、当事者だけでなくその家族全体を考えることの重要性を共有したい。専門家として接する当事者の背景には家族の存在があることを、参加者の皆様に少しでも実感していただければ幸いである。

略歴

- ・2021年-2022年 日本学術振興会 特別研究員 DC2
- ・現職 株式会社LITALICO LITALICO研究所 チーフリサーチャー
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 客員研究員